

教員としての力量形成：
高校での教育実践を振り返って

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 美津恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8390

教員としての力量形成

高校での教育実践を振り返って

中川 美津恵

はじめに

福井大学教職大学院のスタッフの一員として関わるようになって、1年が経とうとしている。ラウンドテーブル、合同カンファレンス、木曜カンファレンス、FD会議など、最初は特有の語彙になかなか馴染めなかったが、先生方の説明やレクチャーを受け、また参加を重ねる中で少しずつしっくりしてきた。

福井大学の教職大学院は他の大学院と一線を画する。院生を育てるコースは、現職の教員を対象にしたものと教師を目指す学生を対象としたものの二つがある。大学のスタッフがチームを組んで院生が勤務する学校や教育機関に赴き、学校が抱える課題の解決を通して院生の教師力を高め、学校のリーダーとして育てるコースと、長期インターンシップで配属された学校現場で実践を通して教師としての専門力を学ぶコースである。

大学のスタッフが現職院生の学校へ出かけるということは、管理職始め職場の先生方全員と関わりを持つということであり、院生一人の教師力アップだけでなく、学校全体の改革につながってゆく。外部の風を入れることで、学校は開かれ、課題が見えてきて、それに即した実践研究が可能となる。福井大学の教職大学院が学校現場と大学院の組織、スタッフがともに力をつけるシステムということを今年度感じ取ることができた。

教師は未来を担う子どもを育てる。教師の力量一つで子どもの可能性は無限に広がる。責任は重大だが、やり甲斐のある仕事である。知識基盤社会の現在、専門職としての教師力を高めることは強く求められてい

る。私はカンファレンス等で院生の話を聴き、課題の解決に向け、考え合い話し合う中で、「三人寄れば文珠の知恵」を実感し、協働研究の端緒となることに喜びを感じている。

今、私ができることは学校現場での経験を微力ながら活かすことであろう。今回、私の拙い実践を振り返ることで、教師の力量形成を考える一助になれば有り難い。

1. これまでの振り返り

～高校30年、中学校3年、行政2年、小学校3年～

昭和49年の春、私は教師の異動を報じる新聞に自分の名前を見つけ、奥越の高校に赴任した。当時は新聞発表まで異動先を知ることはなかった。教師生活のスタートを切ったのは定時制の高校であり、2年後、全日制に移り、1年経て、2校目となる福井市内の普通科高校に異動。8年勤め、次に坂井地区の職業高校に5年、更に福井市内に移り、2つの普通科高校に合わせて14年。県立の高校5校に30年勤務したことになる。

その後、初めての義務制の学校に異動。福井市内の中学校と小学校で計6年、そして2校の勤務の間に2年間、初めての行政職に就いた。

以上、総計38年間、奉職し、平成24年3月定年退職した。

今、痛感するのは、それぞれの職場で関わり合った多くの方々のお蔭で最後まで務めおおせたという思いである。深謝するばかりである。失敗や失言など数え切れない。子どもや同僚や管理職や保護者や地域の方々に教師として育てていただいた。今回、『教師教

育研究』に掲載していただくのは、学校現場36年の歩みのうち、30年在職した高校で、私が教師として拠り所となる生活を送るようになった坂井地区の職業系高校、坂井農業高等学校での実践である。

本文を記すことになるうとは、本学に所属するまで夢にも思わず、また、現在の教職大学院のシステムにある記録して残すといった習慣も私にはなく、これから綴るものは限られた資料と私の記憶だけを頼りとするので、偏ったものになるだろうし、記憶違いもある。従って、本文は一人の教師が実践事例のひとつまをできうる限り、率直に記したものとみなしていただければ幸いである。

2. 教師という職業

(1) 生徒にとって心に残る教師とは

本文を書くにあたり、教師として自立したというか、私が手応えを感じたのが教師12年目からの5年間であるのだが、それは私だけの独りよがりかもしれないと、教職大学院で毎週行なわれるFD会議で話したところ、松木健一教授から次のような助言をいただいた。

福井大学の学生を対象にした松木教授のアンケート「心に残っている教師」に拠ると、人気を集めた教師の年代は3つの山ができたという。20代、30代、50代の先生。人気の理由は、20代の教師は子どもと一緒にサッカー等で汗を流し興じることができることに、30代の教師は親身になって生徒の相談に乗ることに、50代は先生自身の人間性が魅力となって児童や生徒を引き付けるようだ。男性教師と女性教師の年齢の山は少しずつ異なるようだが、仕事盛りといわれる脂の乗り切った40代の教師は意外と人気が低かったと伺って、40代は、仕事に慣れ、自信過剰に陥る時期で、それを子どもたちに見透かされているのではないかと思った。

松木教授はまた、私が手応えを感じ取った理由を、坂井農業高校に在職中、取り組んだ研修なり研究会等での勉強があったのではないかと質問された。それまでの職場では経験しなかった研鑽を積んだために、教師力が飛躍的に上昇し、それが自信につながったのではないかということだろう。しかし、当時を思い出し、領域や教科に関する外部の研究会で研鑽に励み、力を蓄えたという事実は残念ながら見当たらない。

私の場合は、ひたすら職場内で鍛えられたというこ

とだろうか。On the Job Training に尽きると思う。現場で揉まれた経験が私を成長させたということは言えると思う。

私が坂井農業高校で担任に打ち込んだのは30代。ベテランでもなく、初めての職業系高校ということで生徒との受け答えも手探り状態であったように思う。「前の学校」での経験はあまり活かされず、毎日毎日が発見の連続であり、少しオーバーに言えば闘いだった。担任した生徒らの心情は今となっては推し量ることもできない。私が全力を注いだつもりで、単に自己満足していただけのことかもしれない。卒業して四半世紀経過した今、卒業生に聞いてみたい気もする。

(2) 学び合い刺激し合う友情の関係

『教育力』の中に、「教育の基本原理はあこがれにあこがれる関係づくり、学び合い刺激し合う友情の関係」であること、「教師の大切な仕事は、学ぶことの面白さ、大切さを伝える総合力」であり、教師とは「感動（ああ面白かった）と習熟（何かができるようになった）を生徒に与えるべき」人であり、従って教師は「資質が大きく影響する」職業で、「人間性、能力全てがあらわになってしまう。全部見透かされてしまう。ごまかしがきかない難しい仕事」なのだがあるが、教育の核心を衝いていると思う。教壇の前に立つとき、生徒の前に素のままの自分をさらけ出していることを常に感じていた。知識や経験の差はあるが、それらは脆い武装に過ぎず、出来事や教材を媒介に、結局は人間と人間がぶつかり合う営みであった。生徒を無理に自分の論理でねじ伏せると、後から必ずしっぺ返しを受ける。教師の面子を保つのに汲々とするのではなく、生徒の考えを受け止め、自分の考えの中に少しずつアレンジしながら取り入れていくことが大切なのだと考えている。

(3) 教師は就きたい職業か

新聞に「子どもの就きたい職業は…」の記事を見つけた。アジア8ヶ国・地域の6～15歳の子どもを対象に調査したもので、日本の1位はパティシエ、2位医者、3位サッカー選手。気になる「先生」だが、何と中国では1位、更に台湾、韓国など6ヶ国・地域で2位。日本は5位。アジアで先生の人気は高い。

自分が志し、生涯を懸けて取り組んできた教師の人気の高いのは正直、嬉しいし、この人気が維持されることを願う。ただこの調査は小学生・中学生対象であ

る。就職年齢に近い高校生・大学生で教師を志望する割合は果たしてどれくらいあるのだろう。

私が就職した頃は高度経済成長期で景気が良く、都会を目指す人も多かったが、女子は地元志向であり、大学を出て教員になる人は多かったように思う。

私が教師を目指すきっかけとなったのは、小学校3年生の時、学校に教生として教育実習に来た福井大学の学生と出会ったことによる。子ども好きな、一人の「先生の卵」の魅力に引かれ、「先生」が目標の一つになった。加えて、附属中学校、附属小学校での自らの教育実習で指導教官に認められ、教師を第1に志望するようになった。当時は現在のように丁寧な「キャリア教育」も「自分探し」の時間もなかったが、選択肢が少なかったことが私にとっては幸いしたといえる。当時、私が在籍した「教育学部中学校教員養成課程国語科」は現在の「教育地域科学部学校教育課程言語教育コース」に当たるのだろうか。そこに4年間学んだので、中学校の教師を希望していたが、実際の赴任先は高校となって、最初は不安な気持ちを抱えて教壇に立った。

3. 教師として立脚点となる学校

～坂井農業高等学校（30代の5年間）での歩み～

(1) 農業高校の核心

農業高校の核心を占めるのは実習ではないかと思っている。実習の対象は植物であり、動物であって、それらには「命」が宿っている。作物、野菜、果樹、草花などの植物や豚や牛や鶏など動物の「命」を保つには人の世話が必要となる。栽培も飼育も1日も世話を怠ることはできない。休めない。そこが普通科の教科の学習とは違う。国語の課題を1日伸ばしにしたところで、1週間後にしたところで教師の心証を損なうだけである。国語の勉強は追い込みが効く。植物や動物の命ははかない。その日その日の「水」や「餌」が不可欠であり、人手が要る。

残念ながら中学生に農業高校の人気はあまり高くない。成績による選別で振り分けられてきた生徒もいる。高校卒業という資格を得るために、生徒はやって来る。そんな彼らに実習が待っている。真夏の炎天下の下で、時には凍てつくような吹雪の下で、どんな時にも休むことは許されない。容赦なく厳しい作業が課せられる。しかし、汗しながら黙々と取り組む実習を経て、生徒は忍耐強くなり、将来の社会生活に何より重要となる

勤勉な姿勢を徹底的に心身に叩き込まれる。私も生徒が取り組む除草や清掃作業に何度も立ち合って、農業高生が作業に取り組む丁寧さに感心したのを覚えている。

同僚から兼業農家の先輩教師の話を聞いて仰天したことがあった。生徒にも厳しいその教師は家庭にあっても同様であったらしい。学生の息子さんが試験の時も農作業を課し、免除は一切しなかった。ある時、試験勉強のため作業が遅れたか、できなかったか、お子さんの学用品を焼いたと聞き、愕然とした。この話は直接、その先生から伺ったのではないのだが、普段の授業から「然もありなん」と思わせる教師であり、生徒たちもその先生を恐れつつも敬っていたように思う。私も農業への真剣な取り組みを身をもって体現してられるこの先生の生きる姿勢に圧倒されていたし、尊敬していた。

教員になって初めての職業系高校、それが命を育む農業高校であったことは私の教師人生の転機となった。地に足の着いた教育を学んだ。普通科高校しか知らなかった私が初任校から3校目、12年目から5年間、33歳から38歳まで勤務した学校。その学校で私は教師の基盤、核というべきものを得たように思う。そして、さらに、持ち上がりで卒業まで担任したこともその後の教師生活の大きな支えとなった。

(2) 高校教師としての質的な転換

坂井農業高校が私の転機となったと述べたが、前任校と変わるものは何だったのだろうか。

坂井農業高校は坂井平野の中心に位置し、普通教室のある本館の他に実験実習教棟、温室や鶏舎、牛舎、豚舎、校舎の周辺には水田や野菜園、さらに金津町山室には果樹などを栽培する山室農場を抱える。学校の性格上、恵まれた空間が必要なのだが、この環境を機能させていくには大変な苦労があったと思う。当時の学校は5学科あり、募集定員は各40名、合計200名であり、学校全体では600名であった。各科定員の15%程度の推薦入学を中学校に募った。70年の伝統を誇る農業高校で、福井農林高等学校と並ぶ地域の名門校であり、高等教育を受けなかった頃は農家の長男の進学先であり、卒業生は地域の名士として各地で活躍されており、坂農出身者であることを誇りとされていた。私は平成2年3月に学校を離れたが、平成4年には学科改編で4学科に、平成9年には同じく改編で3学科300名弱の小規模校となった。そして、平成26年4月、学

校再編で「福井県立坂井高等学校」（総合産業高校）に生まれ変わった。

私が赴任したのは昭和60年4月。前年に卒業生が前庭に寄贈した「花時計」の三色スミレが咲き誇っており、農業高校に迎えられたという実感が湧いたのを覚えている。5学科はそれぞれA（農業科）、Z（畜産科）、M（食品化学科）、E（農業土木科）、H（生活科）とアルファベットの略称で呼ばれており、専門科目の教師がその科を背負って立つという感じが強く、圧倒的な存在に映った。

現在、「農業」は地球環境問題、エネルギー問題などで脚光を浴び、大学でも農学部の人気は高くなっている。70億を超える地球の人口を維持するために食糧の増産は不可欠であるし、そのためにバイオ技術も求められている。農学部には普通科高校の理系から進学するのが普通であり、人気の高さもあってハードルは高い。

当時、農業高校から大学の農学部に進むのは、学校でトップクラスの生徒、数名であった。主に推薦されて進学し、卒業後は母校や農業高校で教職に就いて、後輩の指導に当たることが望まれていたように思う。優秀な生え抜きの卒業生は、身をもって後輩に範を示す立派な存在であり、生徒もより親しみをもち、慕っていた。これは今も続いていて変わらないのではないかと考えている。



(3) 食品化学科（M科）の学級経営

～担任としての3年間～

a. 副担任、専門科職員との連携

坂井農業高校赴任3年目に私は食品化学科の1年生39名の担任になった。普通教科の教師が担任になると、副担任には専門教科の教員が入ることが殆どだが、この時は体育科教師が副担任となった。剛健な体躯の持ち主で、生徒指導面でにらみをきかせるといった一面もあったが、私より若く、明るくひょうきんでユーモアに溢れ、私をいろいろ助けてくれた。何より坂井農業高校の卒業生であり、生徒にとっては良き先輩であった。坂井農業高校で学び、山室農場で梨の袋掛け、草刈り、大根の種まきなど実習に精を出し、部活動に励み、卒業後も精進したことが実を結んだのであろう、その後、国体優勝、国際大会で日本代表になるなど、輝かしい成果を上げている。そのため、彼のことは重みがあり、説得力があった。

食品化学科の教育課程

教科	科目	学年				計
		I	II	III		
国語	国語 I	4				4
	国語 II		3	3		6
社会	現代社会	2	2	2		6
	地理歴史			(3)		3
数学	数学 I	3	3			6
	数学 II			2		2
理科	理科 I	3	2			5
	化学			3		3
保健体育	体育	3	2	2		7
	保健	1	1			2
芸術	音I・美I・書I	(2)				2
外国語	英語 I	3	2			5
小計	計	21	15	15		51
農業・家庭	農業基礎	4				4
	総合実習	3	2	男5 女3	男10 女8	
	食品製造	3	4	3		10
	食品化学		6	4		10
	応用微生物	2	2	2		6
	食品製造機器		男2		男2	
小計	家庭一般		女2	女2	女4	
	計	12	16	14		42
選択教科	数学 II			(2)		(2)
	英語 I		(2)	(2)		(4)
	簿記会計 I		(2)	(2)		(4)
	商品			(2)		(2)
	芸術(音II 美II 書II)		(2)			(2)
小計	計		2	4		6
特活	ホームルーム	1	1	1		3
	クラブ	1	1	1		3
マルチアワー		1	1	1		3
合計	計	36	36	36		108

また、専門科教職員との連携はとても大事なことであった。カリキュラムでは専門科目の比重が高い。職業系高校なら当たり前のことである。実験や実習など長時間にわたって生徒は専門教科の先生のお世話になっている。実習で生徒は座学のととき異なる表情を見せることも多く、専門教科の教職員は私が気付かない情報を持っていた。

私は専門科教棟に足繁く通って、学習面や生活面でできる限り情報を集め、生徒を認めるための材料に活かすように努めた。生徒の成長のための大切なコミュニケーションであったと思う。

b. 保護者との意思疎通

また、私が特に心がけたのは、保護者との意思疎通であった。3年間頑張って実習や授業に取り組み、資格取得や部活動に励み、反社会的行為に走らず、不登校にならず、学業を終えるのは実はなかなかしんどいものである。せっかく入学しても退学していく生徒もいた。保護者と手を組んで生徒を支えなければならない、そう考えて、欠席・遅刻・早退に関することや気になる心身の様子など、連絡を密に取り合い、家庭訪問し、保護者と意思疎通を図ろうと努めた。保護者の方はとても協力的で、生徒への温かい思いを汲み取ることができた。そうした良好な関係の成果であろうか、クラスは1学期間の欠席ゼロ、遅刻ゼロ、早退ゼロの記録をうち立てた。本当に嬉しかった。大袈裟に映るかも知れないが、職業系の学校では、39人のクラス集団がたとえ1学期という短い期間でも休まない、遅れないというのはなかなかたいしたことなのである。汽車通学の生徒もいる。毎日早朝に生徒を送り出すという保護者の支援と理解が生徒の快挙につながったのである。

この記録にはもう一つ大きな要因があった。5学科の一つ、生活科の存在である。生活科の生徒たちが食品化学科と同様に、皆勤、無遅刻であったのだ。生徒たちはお互い張り合って休まなかった。自分一人が休むことで記録が破れると思うと、体調が悪くても少し無理をしてでも登校したようだ。

そして、2学科の生徒が一丸となって頑張ったこの取組みを、教務主任が認め、全校集会で近年にないこととして紹介されたことも生徒には（担任にも）一層の励みになった。

2年生のときは協力的な保護者に甘え、生徒の乳幼

児の頃の写真を借り、子育ての苦労や子どもへの期待を記してもらい、学級通信「young」に掲載した。子どもを持つ親として共感することが多く、発行しながら感動を味わっていた。

学級通信「young」より



c. 担任団のつながり

3年間持ち上がりで担任団のつながりは年々強固になっていった。「この学年は〇〇な学年」と校内外で評価される。「〇〇」はプラス評価になるように、担任団は協力し合って、自分のクラスだけでなく、学年全体の向上に取り組んだ。「蟻の穴から堤も崩れる」である。担任会、学年会で生徒の力の伸長のために策を練り、学年集会などの機会を捉えて、学年としてのまとまりを訴え、生徒の自覚を促してきた。生徒指導で締めたり緩めたり、と担任団は協力して支え合った。いわゆる同僚性の構築を図ってきたのである。

中でも生活科の担任は、学習指導も生徒指導もつばを押さえており、しかも話術に優れ「なるほど」と思

わせる論を常に展開していた。しかも温かい人柄で寛容さがあった。私はこの先生に生徒指導のことをよく相談し、助言を受けた。指導のやり方を見習い、話の材料も得て、生徒にも対応した。5人の担任団で学年副主任に相当する先生はクラスのこと、学年のことをよく見極めていた。各担任の力量もしっかり把握していた。主任を的確に補佐し、学年団をまとめていた。私にとってはこの先生がロールモデルであり、大きな影響を受けた。

そして、学年団をさらに生徒指導部をはじめ農経部、教務部などが強力に支えてくれた。縦糸横糸がうまく働いていたのである。時にはルールを犯し謹慎になる生徒も出て、厳しい指導もあったが、その底には温かいものが流れていた。1年1学期の2学科の皆勤の成果も功を奏したのか、2年後、卒業時に授与された皆勤賞の人数は例年になく多く、賞賛された。「最初が肝腎」を如実に示した例といえよう。

食品化学科と競い合った生活科は、卒業生37名中、半数近くの18名が皆勤賞という素晴らしい成果を収めた。

		皆勤者数	割合
第37回 平成元年度(H2年3月卒業)	卒業生総数 180	35	19.4%
	生活科 37	18	48.6%
	食品化学科 37	10	27.0%
第35回 昭和62年度	卒業生総数 174	16	9.2%
第34回 昭和61年度	卒業生総数 177	13	7.3%

d. 学校行事を通して

○ 文化祭

昭和63年度の文化祭は創立70周年を記念し3日間のうち1日を10年ぶりに公開した。実習で作った野菜、草花、卵、お茶、ジャム等の販売もあり好評であった。職員劇やヤングフェスティバル、学科展、チャリティバザーなど盛りだくさんで、担任する2年食品化学科は「模擬店」を担当した。学科展でも3年と分担して

「漬物」をテーマに展示に迫られたが、生徒は両方を楽しんだ。模擬店ではアンケートをもとにメニューを決定（かけうどん、きつねうどん、フランクフルト、ジュース）。食券、食材、器具の調達、保健所への届け出、検便、会場設定等の準備、当日は調理、配膳に生徒はテキパキと対応し、火傷の心配をする担任を笑い飛ばした。うどん200食、フランクフルト150本をさばき、会計処理にも苦戦していたが、「運営の部」で1位となり、報われたように思う。

平成元年度の文化祭のテーマは「出力全開～やるときゃヤル～」。3年食品化学科の生徒にとって、最後の集大成。開会式とホーム展の担当に決まる。ホーム展は「食品の加工と製造」。これは生徒にとってはお手の物。納豆、豆腐等、大豆を原料とする製造工程や加工品の展示に知恵を絞る。乳製品ヨーグルト、カルピスも同様に展示。プレゼンも工夫されており、分かりやすかった。

しかし、開会式の企画には悩まされた。保育園児も出演するミュージカル案も出たが、「台本はどうするの」となり、挫折。結局、オープニングは和太鼓を豪快に打ち鳴らすことに。開会式は30分。太鼓だけでは時間が持たず、後半は制服ファッションショーとする。大太鼓1台、小太鼓7台は生徒のつてを頼り、春江町の神社で借りる。半被姿の生徒8人はステージで揃ってばちを振り下ろす。ダダーン、ダダーン、太鼓の響きは会場の観客の体のリズムと共鳴し合う。普段寡黙な生徒の思い切りの良い見事なばち捌きに驚く。今まで活躍の場を与えてこなかった、一面しか見てこなかったと反省もする。生徒の可能性、秘められた能力を見出すのが教師の務めであるのに。

太鼓の演奏終了。第2幕、ファッションショーの開始である。県内の専門学校4校、県内の県立高、私立高17校。現在なら確実に動画撮影していた場面だが、残念ながら証拠の写真は1枚も残っていない。最後に司会はこんなふうに締めくくった。「皆さんご覧になって如何でしたか。やっぱりダブルボタンでとても短いスカートの坂農が一番ですね。今日はもと女子高校生だった人にモデルになってもらいました。（ここで坂農の制服を着たモデルが登場）フィナーレは21校の制服の勢揃いです（20+1名の女子生徒が並びにこやかに一礼）」この日、私は20年ぶりにスクールソックスを履いたのである。

○収穫感謝の集い

翌日は農業高校独自の学校行事、収穫感謝の集い。1年間の自然の恵みに感謝する餅つき大会である。農業委員、蒸し係、つき係、臼取り係、加工分配係らが手際よく対応する。舌鼓を打って、農業高校ならではの体験学習の素晴らしさを満喫する。汗し収穫した命をいただく催し物は1年の勤労の振り返りともなる。感慨深い。

文化祭は他にブラス演奏、職員劇やヤングフェスティバル、生徒コンサート、映画鑑賞会、ダンス大会、閉会式などの催し物が体育館で、教室では先生の似顔絵展、ステンドグラス展、部・クラブ・委員会の展示、ホーム展、チャリティバザーなどが開かれた。3年の生徒は複数の係を担い、まさに八面六臂の大活躍であった。

文化祭、体育祭等の学校行事を通して、生徒は大きく成長した。進学校の生徒も学校祭で燃焼し尽くさないと、その後の受験勉強に弾みがつかないことを実感したが、農業高校の生徒も同様である。学校行事を通して責任感、リーダーシップが大いに発揮され、やり遂げた充実感に満たされる。体育祭でも勝敗は別に、応援や造り物や競技運営に精魂を傾け尽くすと、最終段階の就職に向けて、最後の頑張りを見せて取り組むことが分かる。

○農業クラブ

生徒会に当たるのが農業高校の場合、農業クラブである。農業クラブの仕事はかなりある。立合会演説会で執行部の役員を決め、総会、リーダー研修会、委員会活動等を経て、学校行事を企画運営する。ここまでは他の高校と同様であるが、農業高校の場合は県内3校の農業高校の持ち回りで年次大会を行う。さらに農業クラブ全国大会があり、農業鑑定競技、プロジェクト発表に代表者は出場する。プロジェクト発表というのは、例えば「春まき栽培における市販ダイコン品種の比較について」農業科の野菜専攻者発表、「漬け物（市販品）中の食品添加物について」食品化学クラブ発表などが『白峰 第28号』に掲載されているが、実験法、データの取り方など専門性が高い。専門教科の教職員の熱心な指導と生徒の真剣で粘り強い取組みのなせる結果だということが分かる。

○柔道大会、創作ダンス大会

また、男子は柔道大会、女子は創作ダンス大会が1月下旬に開催され、1年から3年までクラス対抗で競った。創作ダンス大会では、クラス毎に「人生一夢を抱いて」、「気象状況」「四次元の世界」などテーマを決め、テーマに沿った内容のダンスを考え、衣装を工夫し、選曲し、女子全員で踊る。主に体育の授業時間を当てて練習するが、放課後も打ち合わせやコミュニケーションは欠かせない。ダンスでは、動きがテーマに合っているか、作品に起承転結のように流れや変化があったか、音楽や衣装がテーマに合っているか、全員が身体を大きく使って踊っていたか、集団がまとまっているか、採点される。身体表現というのは誰の目にも一目瞭然で出来映えが分かり、クラスの団結力が如実に示される。生徒は時には口論しながら振り付けを考え、練習し、晴れの舞台に臨んだ。本番では担任は何もできず鑑賞しているだけだったが、踊る生徒の高揚した気分は伝わり、興奮もする。途中、生徒の仕上がりを見守っているのはなかなかつらく、こうしたらあしたらと口を出したくなるが、生徒に任せる方が巧くいくことが多かったように思う。

e. 進路指導

社会人として自立できるよう指導するのであるが、農業高校で学んだ専門性を活かす職場に行くことはあまりない。農業に従事する者はわずかであった。ただ前述したように実習等で勤勉な姿勢が身に付いているので、意欲的に就職先や進学先を決めていた。

f. 教科指導

普通科高校での国語の比重は重いと思う。「国語は諸学の母」と信じ、生徒の前に立ってきた私にとって、職業系高校における国語科の扱いは寂しいものであった。カリキュラムを見れば歴然としていた。卒業単位108単位のうち国語は10単位である。1年は「国語Ⅰ」4単位、2、3年は「国語Ⅱ」3単位ずつであった。限られた単位数の中で生徒の実状に応じて、基礎学力の定着、向上を図り、社会で通用する読み書きの指導を徹底するにはどうしたらよいか。私は教科書の次に、新聞記事を大いに活用した。新聞記事の使用語彙は義務教育修了程度と聞いたことがある。生徒は卒業後、殆どが就職する。1、2年先に社会人となる生徒が適切に正しい情報を選び、理解できるようにしたい。そう思い、記事を選び、生徒に読ませた。難解で専門的な内容には注釈がちゃんとついているが、新聞をきち

んと読みこなせるようになるのは簡単ではない。生徒はあまり新聞を読んでいない。読むのはスポーツ欄か芸能娯楽欄か、社会面記事くらいである。できるだけ生徒の興味を引きそうな記事を選んだ。活字に親しんでほしいと願い、材料を探し続けた。そして、雑誌、書籍につながるように話を向けたが、残念なことに本に手が伸びる生徒は少なかった。読書をする生徒は記述力もあり、感想文や作文、詩、短歌などの創作も巧かった。

国語という教科は、世の中の森羅万象、全てのものが教材となる。文字情報、音声、映像、そして、雄大な宇宙自然である。私は教師になって、生徒に何をどんなふうに話そうかということばかり探し続け、考え続けていたように思う。別な高校での話だが、授業中、一羽のカラスが廊下に紛れ込んできた。カラスは逃げようと教室横の長い廊下をツツーツツと行ったり来たりし始めた。それこそ面白い新聞記事を導入にして授業を組み立てていたのだが、残念ながら私はこのときカラスに負けた。生徒は廊下のカラスの動きに集中したのである。本物にはかなわないとシャッポを脱いだことがあった。

授業では50分の組立・構成に頭を絞った。読む、書く、聞く、話す活動をできるだけ組み入れ、単調にならないようにした。序論・本論・結論のように、序破急を意識したが、巧くいかないときも多かった。

授業を振り返ると、講義型授業が殆どで、教師の考えを伝えるのに懸命で、生徒にとってはテストに備えるものとなってしまったように思う。○×の正誤問題や知識の有無を確認するだけの閉じられた課題でなく、思考力、判断力を養う課題を出すことがいかに生徒にとって大切か、そして実際は難しかったことを教職を退いた今、痛感している。

これも別な高校での話だが、森鷗外の『舞姫』の授業を終えたとき、生徒の心に一番残ったのは、太田豊太郎がエリスを置き去りにして帰国することについて、班で考え討議し合った活動であった。生徒は明治という時代、近代化政策の歪み、国家の使命や家の制度や職業観などあれこれ考えながら、二人の愛について論じ合っていた。いろいろな要素が盛り込まれ、語られ、一つの結論にまとまることはなかったが、生徒はおそらく満足したのだろう。

教科書に掲載される小説や詩歌など文学教材、評論教材は普遍性がある。時代や文化を超えて、人類に共通する課題意識を与える。そういった素晴らしい「文

化財」を生徒にもっと有効に与えられなかったか、悔いが残っている。新聞の投書欄で何度か見かけたことがある。高校で習った中島敦の小説「山月記」を人生の折々に思い出すと。己の心に人食い虎が巣くうのを認め、生き方を思索し、心が揺れるということを投書子は綴っていた。同じく夏目漱石の小説「こころ」にも影響を受けている人は多い。古典の一節や詩歌を誦んじ、肉体にとけ込ませているような人の存在も知っている。国語という教科を担当した責任の重さを今さらながら噛み締めている。

佐藤学教授は、日本の高校の授業研究、研修の機会には世界最下位であると手厳しい。それには教育行政、教育学者の責任も大きく、学校経営の問題もあると分析する。しかし、全国の高校を訪問して、3年ほど小中学校に遅れてはいるが「学びの共同体」の学校づくりを強力に支援した結果、旧態依然とした一斉授業からの変革が始まっていると評価する。

高校生の4割が校外での学習時間はゼロで一冊も本を読まないという現実、「学びからの逃走」が浸透した高校生を学習に向かわせるには、プロジェクト型のカリキュラムの開発と「協同的な学び」を授業実践で実現することであると佐藤教授は、今後の高校の取り組みを期待する。

アメリカのスタンフォード大学で教鞭をとるティナ・シーリグ氏が学生に与えた課題の面白さにはわくわくする。まさに思考力、判断力、表現力をみる課題である。その課題というのは「今、手元に5ドルある。2時間でできるだけ増やせ」。クラスを14チームに分け、元手として5ドル入った封筒を各チームに渡す。水曜日の午後から日曜日の夕方までに計画を練り実行に移す。いったん開封したら2時間以内で事を終えること。チームは実際どんなことをしたのか日曜日の夕方に1枚のスライドにまとめ提出。月曜の午後、チーム毎に3分間で発表。シーリグ氏のねらいは「常識を疑い、チャンスを見つけ、限られた資源を活用し、創意工夫させる」こと。学生が「企業家精神を発揮」するよう仕掛けたのである。そして、多くのチームが期待以上の成功を収めた。成功の一番大きい要因は元手に全く手を付けないことだったのだが、学生のさまざまなアイディアに感心した。個々の学生の優秀さもあるだろうが、チームで協働し結集した力に拠ることも大きいのではないかと。

シーリグ氏は、次の課題に、10個のクリップを入れた封筒を渡し、「開封してから4時間の間にできるだ

け多くの『価値』を生み出せ」とハードルを上げた。これは赤いクリップ1個から物々交換を重ねて1年後に1軒の家を入手したカイル・マグドナルドの物語をヒントにしたそうだが、この課題にも興味を引き付けられた。そして、ここでも学生たちはシーリグ氏の心配を吹き飛ばす成果を上げたのである。

シーリグ氏の演習課題のような設定を、高校の授業で取り入れると、生徒はどんなに意欲的に取り組むだろう。ハードな課題を設けることで、生徒の挑戦欲はかき立てられ、仲間と夢中で学び合うに違いない。まさしく広石英記教授が記すように「教育とは、子どもたちの学びを、いかにワクワクした知的興奮のある活動へと導くかといった学びのサポートに腐心する」営みなのだ。難しいのは、課題の設定である。これには教師の専門的な力量が試されるが、何とやり甲斐のある仕事ではないかと思う。

また、佐藤教授は、高校の教師は教科の専門主義が強く、教職専門性が未熟であると指摘する。高校教師は学問の研究者ではなく、教科の教育者であるべきと。さらに、高校教師の自伝には学校行事、生徒指導、部活動、進路指導の思い出が綴られ、授業実践のことが記述されていないと鋭い指摘は続く。確かに高校では内容が最優先され、教え方が吟味されることはあまりなかったが、教職にシフトした研修、研鑽を積むことがもっと必要ではないか考える。

g. 生徒との意思疎通

現在、高校で実施しているかどうか不明なのだが、当時は「生い立ちの記」というものを書かせ、入学時、生徒に提出を求めた。15歳の自分史である。担任はこれを読んで、生徒の人となりを知った。自分史からの恩恵は計り知れず、面談にも活用でき、有り難かった。書くことは振り返ること、自分を客観的に見つめ直すということ、自分を捉え直すことで生徒は成長すると思う。教職大学院での長期実践研究報告もこれと同じような流れにつながると思うのだが。

h. 生徒指導の悩み

自分に自信を持てず、自己有用感の低い生徒は「どうせ『さかっぴ』だから」と投げやりな言葉を吐くことがあった。高校進学の際、ふるい分けられ、劣等感を持つ生徒もいたし、反社会的な行為に走る生徒もいたが、一時的なことだったように思う。

自己肯定感の低い生徒も日数を経るにつれ、学校生

活を楽しむようになってきた。これには仲間の存在が大きい。一人では耐えられないことが仲間となら頑張れるのである。みんなで体験すること、実習すること、実験すること、の意義は大きかった。実習服に身を包み地下足袋を履き、学校のバスに揺られ、山室農場で日がな一日、首が痛くなるまで梨の袋掛けに従事する中で、最後まで仕事をし終えた達成感、充実感で満たされ、明るく前向きな姿勢で生きようになる。労働の後には笑いが生まれ、明日に希望をつなぐ、そんな印象を持った。

私が担任した「食品化学科」というのは、食品関係の技術者を養成する県内で唯一の学科であった。福井農林高校にも若狭農林高校にもない学科である。食品の製造や成分の分析、衛生についての知識・技術を中心に学習し、商品、簿記会計、コンピューターを取り入れた流通関係についても学ぶ、製造から販売まで一貫して学習する学科で、危険物取扱者、簿記技能検定、毒物劇物取扱者の資格も取得できた。イチゴジャムづくり、バイオ実験、ブドウ糖プラント実習など、専門性が高い学科で、生徒が白衣を着て顕微鏡をのぞく姿は研究者のようで格好良かった。

受け入れた39名をそのまま欠けることなく、全員卒業させるぞとずっと念じてきた。全員卒業が3年間持ち上がって担任した者の責任である。誰よりも食品化学科の生徒のことは熟知している筈であった。生徒の話を聴き、話し、意思疎通を図ってきたつもりであった。班新聞、班ノートに自分たちの思いを綴らせた。保護者とも連絡を取り合ってきた。しかし、退学者を出すことになった。進路変更していった二人のことは今も忘れられない。何とか一緒に卒業させられなかったか、私の力のなさを悔いるばかりであり、二人には申し訳ない気持ちでいっぱいである。

終わりに

今、グローバル化、少子高齢化等による急激な社会構造の変化の中で、子どもの学ぶ意欲や気力、体力は低下傾向をたどる。社会性やコミュニケーション能力の弱体化、依然深刻ないじめや不登校の問題、インターネット等での情報社会の影の部分の顕在化、家庭や地域の教育力の低下など、学校を取り巻く現状を見ると、学校現場に軸足を置いた研究や研修の必要性を感じる。福井県の小中学校の体力・学力は全国トップレ

ベルといわれるが、上位層が薄いという課題もある。

小中学校に籍を置いていたとき、福井市では校区の幼小中連携に力を注いでおり、一人の人間を幼児から中学校卒業時までトータルで育成する視点を持つことは大切と思っていた。今は高校も加わって「福井型18年教育」が推進されており、理想的なものとなっている。

私は小中高とさまざまな校種を経験し、発達段階に応じた支援の仕方、寄り添い方をずっと考えてきた。それをこれから少しでも伝えていけたらと思っている。

今回、教師人生の節目となった坂井農業高校での歩みを振り返った。生徒や同僚から何と多くのことを学んだことか、再認識した。

少子化に伴う入学者数の減少で県立高校は統廃合、学科再編の道を歩んでいる。坂井農業高校は春江工業高校、金津高校経理科・情報処理科、三国高校家政科と統合し、総合産業高校、「福井県立坂井高等学校」にかわった。坂井農業高校での学びが教師人生の基盤と自覚する私には、坂井高校の行く末が気になってたまらない。私の教え子たちもおそらくそうであろう。学校の名前や規模や性格が変わっても、坂井農業高校で同僚や生徒と共有した中身の濃い5年間は変わらず輝き続ける。坂井高校が命を育む農業の真髄を根幹に据え続け、卒業生のような地域の人材を変わることなく世に送り出してほしいと強く願っている。



[参考文献]

- 齋藤孝(2007).『教育力』岩波新書
- 福井新聞(2014).「子どもの就きたい職業は…」4月21日付け
- 福井県立坂井農業高等学校五十年史(1970).
- 福井県立坂井農業高等学校六十年史(1978).
- 福井県立坂井農業高等学校創立八十周年記念誌(1998).
- 福井県立坂井農業高等学校農業クラブ(1988).『白峰』第27号
- 福井県立坂井農業高等学校農業クラブ(1989)『白峰』第28号
- 福井県立坂井農業高等学校農業クラブ(1990).『白峰』第29号
- 福井県立坂井農業高等学校記念アルバム(1990).下村写真館
- 福井県立坂井農業高等学校ホームページ
- 佐藤学他(2013).「『学びの共同体』で変わる！高校の授業」
明治図書
- 佐藤学(2012).『学校見聞録』小学館
- 佐藤学(2012).『学校を改革する』岩波ブックレット
- Tina Seelig(2010).What I Knew When I Was 20. [高遠裕子訳]『20歳のときに知っておきたかったこと スタンフォード大学 集中講義』阪急コミュニケーションズ、2010]
- 広石英記(2014).「序章 教育哲学と教育方法 第1節 教育を哲学する」『新・教育方法論』一藝社
- 福井県教育委員会 学力向上センター(2012).「高等学校教員版 学校全体の教育力向上に関する指針 教職生活全体を通じて学び続ける教員となるために」

福井県立坂井農業高等学校	
本校 〒919-0512 福井県坂井市坂井町吉田 51-5 Tel (0776) 66-0268 Fax (0776) 66-2660	
山室農場 〒919-0601 福井県あわら市山室 0776-73-0560 E. E. E.	
学校の沿革	
沿革 校長挨拶 学科紹介 農業行事 学校行事 進路 行事予定 農業クラブ 部活動 PTA関係 農場案内 リンク トップ	(大正 6年) 2月 文部大臣より設立を認可せられ坂井郡立農学校と称す。 12年 4月 郡制廃止と共に移管せられ福井県立坂井農学校と称す。 昭和15年 4月 新学制を改正し定員を300名とす。 17年 4月 女子部新設。 22年 4月 畜産科新設。 23年 4月 学制改革により福井県立丸岡高等学校が設立せられ総合制として普通課程、農業課程、家庭課程を置く。 元福井県立坂井農学校を西校舎(農業課程)、元丸岡高等女学校を東校舎(普通課程、家庭課程)と称し授業開始。 26年 4月 農業土木、家庭園芸の両科を新設。 28年 4月 農業課程は福井県立坂井農業高等学校として独立開校。 32年 3月 福井県立坂井農業高等学校と改称。 36年 3月 更衣室、ケージ・タリール鶏舎、肥育豚舎竣工。 38年 3月 農業機械実習室、畜産・農産加工実習室、乳牛舎竣工。 40年 9月 外運動場造成。 44年11月 校舎落成、創立五十周年記念式典並びに五十年史発行。 47年11月 旧坂井中学校跡地買収。 53年11月 創立六十周年記念式典並びに六十年史発行。泉水竣工。 54年12月 山室農場果樹棚竣工。 57年 3月 食品加工実習棟竣工。 61年 4月 第2体育館、牛舎、豚舎、汚水処理場、堆肥舎竣工。 62年 3月 自転車小屋竣工。 63年 5月 収納舎、クラブハウス竣工。 平成 2年 3月 生物工学科実習施設竣工。 3年 3月 リフレッシュ事業による第1体育館改修。 3年 9月 CAI実習室設置。 4年 3月 農業管理実習棟竣工。 4年 4月 学科改編により、生物生産科、食品科学科、農業工学科、生活経済科の4学科となる。 4年12月 農業実践室(ミニスーパー)設置。 5年 9月 理科教棟リフレッシュ。 6年 2月 文書処理実習室設置。 8年 3月 環境制御温室竣工。 9年 3月 本館リフレッシュ竣工。 9年 4月 学科改編により、生産技術科、食品科、環境システム科の3学科となる。 10年10月 創立八十周年記念式典並びに八十年史発行。 11年 2月 宿泊研修施設「白峰会館」落成。 17年 3月 畜舎糞尿処理装置設置。 18年 7月 本館教室冷房開始。 18年 8月 第1体育館天井改修。 19年 4月 文科省委託事業地域に根ざした学校給食推進「嶺北養護学校」との連携を始める。 20年 4月 エコロジカルアクリハイスクール(環境を重視した農業高校)宣言 26年 4月 福井県立坂井農業高等学校 閉校 Copyright (c) 2006 Sakai Agricultural High School All rights reserved.